

人はどうして偏見とか、差別する心を持つのでしょうか。常識という名の偏見もたくさんあります。偏見ということ意識していない偏見もわたしたちはたくさん抱え込んでいます。風評被害という言葉がありましたが、風評というのは漠然とした偏見の場合も少なくない。偏見がさらに差別という形で進んでいくことも少なくない。人種差別とか、民族差別、というものはそもそも何の根拠もない、ということを知っているにもかかわらず、人間の歴史の中で、それが途絶えることはない。例えば、性による差別というものを思うと、人間は実に長いあいだそれを持ち続けて歩いて来た、そのこと自体に驚いてしまう。

今日の聖書箇所では、ユダヤ人が持っていた、独特な差別感情が背景にあるのですが、これが新約聖書のいろいろなところに出てくる。ということはこうした差別感情が通り一遍の問題ではなく、とても根の深い事柄としてあった、ということをお話しているのです。

お読みになってわかるように、使徒言行録 11 章は、10 章で出てきたことの繰り返しです。10 章でペトロが経験したことを、彼がエルサレム教会に戻って報告した、そういう記録になっています。その際のエルサレム教会の人々のリアクションがここには書かれています。使徒言行録の著者ルカはわざわざ、ペトロが経験したことを二度書くのです。それは絵本の中の繰り返しがそうであるように、読む側にこのことの重要さを印象付けているのだと思います。

さて、事柄を少し整理してみます。

生まれたばかりのキリスト教会の中心はエルサレムで生まれたエルサレム教会でした。その教会の信者はほぼ、ユダヤ人でした。その中には、いつも言っているように、ヘブライ語・アラム語を話す、生粋のユダヤ人のほかに、外国で生まれたり、育ったりしたギリシア語を話すユダヤ人のグループが最初からありました。そして、エルサレム教会における主流派は生粋のユダヤ人たちであり、彼ら彼女たちは、ユダヤの律法はもちろんのこと、しきたりや慣習を大事に守っていました。当然この二つのグループの間にも温度差がありました。ペトロはそのエルサレム教会を統括する責任者であり、彼自身もユダヤのしきたりを守る生粋のユダヤ人でした。その彼がエルサレム以外の地域に伝道に行くのです。しかしそれはあくまでもエルサレム以外のユダヤの地域であり、彼

の頭の中には、あくまでもユダヤ人伝道、ということが当初からあったのだと思います。ところが彼はその伝道旅行の中で、ローマ人と出会うこととなります。そのいきさつが10章に詳しく書いてあるのですが、自分から望んで、外国人伝道に向かったわけではない彼が、幻の中で、不思議な光景を見るのです。それは天から大きな布のような入れ物がつるされてきて、そこにあらゆる獣や空の鳥が入っている。天からの声はそれを屠って食べよ、という。だがペトロはそれに「とんでもない、清くないものは、けがれたものは食べません」、と応える。ユダヤ人には食べてはいけない食物の規定、食物規定が厳密にあったからです。ところが天からの声はさらに、「神が清めたものを、清くないなどとあなたは言うてはならない。」と語りかけるのです。

それは、清いかどうかは神が決めることであって、あなたが判断することではない、という声です。しかしペトロはその声の意味が分からず思案していた。その直後、ペトロは、招かれて、コルネリウスというローマ人と会うことになり、そのローマ人の家の客となり、イエス・キリストの福音を初めて外国人に語ることになるのです。そしてコルネリウスはイエス・キリストを信じる者とされ、洗礼を受けるのです。

ユダヤ人は、もともとその宗教的な背景から、外国人と出会うこと、接触することをできる限り避けていました。けがれた食物を食べる外国人はけがれているし、その外国人と接触することは自分も穢れた者になると思っていたからです。これまでお話ししてきたように、食物規定というのは、一見自分たちだけのルールのものであって、実はそれが差別の温床になっていくルールでもありました。なぜなら、自分はこれを食べない、ということだけに済まないで、それを食べる人との関係を切断しようとしていくからです。

ペトロがエルサレムに戻って、自分の伝道の成果を皆に伝えたとき、エルサレム教会の人々（それは生粋のユダヤ人たちですが）は外国人がイエス・キリストの福音を受け入れたことの喜びよりも、ペトロが割礼を受けていない、外国の者とテーブルを囲み、一緒に食事をしたことを批判したのです。外国人の信者を自分たちの教会でどう受け入れていくか、ということ皆で相談した、というのではなくて、そもそも外国人と接触した、食事した、ということそれ自体を批判したわけですから、ある意味外国人伝道も何もあったもんじやない。

ユダヤ人としての自分たちのルールを守ることに汲々としていくのです。というか、彼ら彼女たちの視野の中に外国人、というものが入っていなかったのです。

彼ら彼女たちは、そもそも最初のキリスト教会がエルサレムの地に据えられていくときから、「あなた方は、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリア全

土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」というキリストの言葉を聞いた人々でした。全世界でこの福音を、全世界の人々に宣べ伝える、それが最初からの教会の使命だったのです。にもかかわらず、彼ら彼女たちは、ユダヤ人、というところに留まって、そこから動こうとしないのです。

世界宣教どころか、たった一人の外国人と一緒に食事をしたペトロを批判したのですから。

難しい話を今まとめて言えば、ここには二つの事柄があります。一つは、人間は自分とは異質なものに対する本能的な恐怖があります。自分とは文化も習慣も違う外国人に対する恐れというものがあるのもよくわかることです。誰にでもあります。

もう一つ、自分のアイデンティティ、例えばエルサレム教会の人々にとってそれは自分がユダヤ人であるということ、割礼を受け、律法を守り、食物規定を守ることは、自分が何者かということをはっきりと示し、自分の存在はどこに帰属しているか、ということの中心だった。この二つはとても根深い。

ペトロは彼らに対して、事の次第を順序正しく説明していく。それは彼が幻の中で見たこと、それをていねいに語ることでした。ペトロは、自分もエルサレム教会の人々と同じアイデンティティの中で生きてきました。ユダヤ人としてのルールを守り、律法を守り、慣習を守る。彼自身そういう生活をしてきたのです。だから自分を批判した人々の気持ちはよくわかっていました。だからこそ、自分が経験したことをていねいに語る必要があったのです。幻の中で見たしるし、そして天からの声。自分たちはあれが清い、これははげがれていると言っている。これは食べてよい、これは食べてはいけない。しかし、天からの声は、神が清めたものを、清くないなど言うてはならない、とペトロに語りかけてきたことをエルサレム教会の人々に語ったのです。これはペトロが考え抜いて出した、ペトロの意見、考えでは全くない。天からの声でした。もちろん聞かないで済ますこともできたでしょう。しかしペトロは自分が見た幻の中のしるし、天からの声を無視することはできなかった。

ペトロは霊に導かれて、思ってもみない伝道の道が備えられ、コルネリウスと出会い、彼とその家族とに福音を語った。そこで聖霊が降り、彼らは聖霊によって洗礼を受けた、ペトロはそう報告したのです。それは、外国人伝道の歩みが自分が計画したり、自分が願ったりしたことではなかった、そうではなく、神によって導かれたものだ、という報告に他ならないのです。

ユダヤ人が自分たちのルールや慣習に生きる。その中からユダヤ人独特の考え方や、偏見、差別が生み出されていく。それは、生半可なものではない。冷静に考えるなら、わたしたちの中にも程度の差はあれ、さまざまな偏見や差別

が山ほどある。

11章の18節を読むと、ペトロの話聞いたエルサレム教会の人々が『神は異邦人をも悔い改めさせ、いのちを与えてくださった。』と言って神を賛美した。」とあって、ペトロの言葉を受け入れ、そこに神の働きをあることを感謝したということです。確かにこのときはそうだったのでしょう。しかしこの後、使徒言行録を読むと、またパウロの手紙を読むと、この後、エルサレム教会のユダヤ人たちは洗礼を受けたキリスト者に対して、やはりユダヤの食物規定を守るべきだ、と言い出し、割礼を受けろと迫ったり、ユダヤのルールに従うことを求め続けたりするのです。そしてこの問題が、ユダヤ人を中心とするエルサレム教会と諸外国に生まれていく教会との間の分岐点にもなっていくのです。人間の思い込みや、信念と絡み合った偏見、差別感情というものがいかに深いかをまざまざとみるのです。そして聖書はそのことを無視しないで書き綴っていく。しかしペトロがここでそうであるように、どうしたら偏見をなくすことができるか、というような話ではない。偏見がなくなるものなのかどうかも、聖書は問題にしていない。大事なことは、天からの声聞くことなのです。神の示されたしるしを見ることなのです。わたしたちは実に多くの偏見の中で生きている。絶えず新しい偏見を自分の中に作り出している。その自分が天からの声聞く、神の声聞く、それこそがまこと大事なことなのです。

「神が清めたものを、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」

神が受け入れている人間を、この人は自分とは異質だから、と言って排除してはならない、それは聞くこと自体が、わたしたちの生き方の転換を生み出していくような事柄です。

「主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのようものが、神がそうなざるのをどうして妨げることができたでしょう。」ペトロはここで、天の声を聞いて、一歩歩みだしているのです。